1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4391300151		
法人名	株式会社 ラディカ		
事業所名	グループホーム フォーシーズン		
所在地	宇城市松橋町久具2059-1		
自己評価作成日	平成28年11月25日	評価結果市町村受理日	平成29年2月17日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kai gokensaku.jp/43/index.php
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 あすなる福祉サービス評価機構
所在地	熊本市中央区南熊本三丁目13-12-205
訪問調査日	平成28年12月8日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

事業所の理念である「一人ひとりの今までの歩みを大切に、一人ひとりの今この時に寄り添います」を職員全員が理解し実現する為に日々努力しています。男性ご利用者が「お酒を飲みたい」と話された事がきっかけで、居酒屋風夕食会を他事業所と合同で開催したり、職員がホールに花を飾っていると「私も生けてみたい」と話されたので生け花教室を行ってみると、若い頃に習われていた方もいて大変好評だった為今では月に2回開催しています。日々生活される中でご利用者の表情や会話を見逃さず受け止め、毎日のミーティングで統一したケアが実践出来るように話し合い、ご利用者が穏やかに楽しみを持って生活して頂けるよう支援します。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

法人理念である「今この時に寄り添います」をホームの基本方針に直結させていることが、入居者への寄り添う姿勢(傾聴や受容)に表れ、副次的な効果も引き出している。例えば、帰宅願望への思いに応えた支援は落ち着いた生活となり、「晩酌したい」が大々的な夕食会、「生け花をしたい」が定期的な開催となる等日常生活の彩りとして生かされている。また、企画した外出や法人一体となった行事・イベントは豊かな生活の礎に繋げており、地域の中で培われてきたこれまでのノウハウや職員のアイデアの発揮とともに、入居者の思いを引き出した成果が表れている。若い職員も多く、法人全体でスキルアップに取り組み、管理者を中心に、職員同士のチームワークも良く、自宅と同じ様に尊厳を守りながら「その人らしい生活」と、意識を共有しながらケアにまい進している。今後も、法人全体で地域福祉の核として活躍されるであろうと大いに期待されるホームである。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当する項目に○印
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25) ○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19) ○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38) ○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20) ○ 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38) ○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4) ○ 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37) ○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働いている (参考項目:11,12) ○ 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49) ○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う ○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごしている (参考項目:30,31) ○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う ○ 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28) ○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	事業所理念を玄関と職員休憩室2箇所に掲示し、毎日のミーティングやカンファレンス時に確認して実践につなげる様に心掛けている。	法人理念である“一人ひとりの歩みを大切にし、一人ひとりの「いま」「この時」に寄り添います”とともに、ホームとしての基本方針を規範として日々のケアに直結させている。“今”できる事を可能な限り支援していることは多岐に亘った外出支援に表れ、「家に帰りたい」との思いに応えた支援が落ち着きを戻す等意思や人格を尊重した取り組みは大きな成果となる等理念や方針を具体的にケアに反映させている。地域や家族への啓発も行き届いている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	活動内容をフォーシーズン便りを毎月発行し、地域の回覧板で掲示している。また、近くのスーパーへの買い物や行きつけの美容室へ行き、地域との関係が途切れないようにしている。	回覧板を通じた“フォーシーズン便り”による情報の発信とともに、ホームも広報誌で地域情報をリサーチしている。地域の中での買い物やホーム周辺の散歩等地域の中に出かける機会を作っているが、地域の方々との関わりが少ないように感じており、公民館での体操教室等に参加していきたいとしている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	運営推進会議に区長や民生委員の方々に参加して頂き認知症の方への理解と支援方法説明し、地域で困っている人はいないかなど情報交換を行っている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	二ヶ月に一回運営推進会議を開催し、入居者の日頃の様子や生活状況を報告し、現在抱えている問題などにも参加者からの助言や意見などを聞きサービス提供の参考にしている。	定期的を開催する運営推進会議は、資料をもとにした入居者の状況報告とともに、熊本地震対応の経過報告や事例報告による意見交換が行われている。メンバー構成も充実し、参加委員からの意見や質問も多く、有意義な会議である事は議事録に表れている。参加の無い家族には訪問時に運営推進会議の状況を報告し共有化を図っている。	同法人の4事業所が合同で開催されており、多様な観点からの質疑応答が行われている。会議スタート前でもグループホームの状況を確認していただくことを望みたい。更にグループホームに対する意見や話題として挙げられ、サービスに反映されることが期待される。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	運営推進会議の開催や、グループホーム連絡会に参加し、疑問や日頃のケアについての相談を行う事で協力関係を築けるよう取り組んでいる。	運営推進会議参加時や宇城地区グループホーム連絡協議会等を通じ行政担当者との関係が築かれ、疑問点など相談し適切なアドバイスを得ている。行政・地域包括支援センターとの意見交換や、ホームの現状報告や事故報告に出かけ、意見交換を行っている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介護指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	法人内で身体拘束廃止委員会を発足し、外部研修の参加や法人内での勉強会を開催する事で、職員が正しい知識を身に付け実践できるように努めている。	ホーム内外での研修参加や、身体拘束廃止委員会の発足及び虐待報道を受けミーティング時に話し合い意識を強化させている。また、職員の言葉使い「ちょっと待ってください」に職員同士が注意喚起している。入居者の外出傾向を把握し、家族への説明と同意を得、居室に人感センサーを設置したケースもある。	ホーム玄関はオープンな環境であり、今後も所在確認を徹底されることが必要と思われる。
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	外部研修や勉強会に参加し、法人内でも勉強会を行っている。日頃のケアで不適切なケアはないか職員同士ミーティング内で話し合い虐待防止に努めている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	職員が権利擁護の制度について学ぶ機会は少ないが、外部研修などに参加し必要な方には職員間で話し合い、関係者に制度の理解をして頂くなどの対応をしている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	施設見学時や契約時にはご本人やご家族からの疑問や質問には丁寧に答え、不安なことはないか十分に話を聞くように心がけ、納得して頂ける様に努力している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	三ヶ月に一回家族会を開催し、ご家族の意見を求めている。また、遠方にお住まいのご家族には定期的に電話連絡をするようにしている。入居者や家族からの意見・要望はその都度職員間で話し合い可能な限りケアの実践に取り組んでいる。	入居者には日々の中に聞き取りし、“したい、欲しい”等にその都度対応し、生け花をしたいとの声が定期開催に繋がっている。家族には訪問時や電話・メール等により情報を発信し、入居者の思いをホームが代弁し実現させた事例もある。家族会(3ヶ月毎)も開催しているが、集まりが少ない場合もあり、本音を引き出すことは難しいようであるが、地震時には家族から支援物資が寄せられている。	家族同士の交流も参加が多いとさらに活発になると思われる。管理者は家族も巻き込んでいきたいという意向であり、家族の本音を引き出すための工夫、例えばアンケートを行う等検討いただきたい。
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	管理者は週一回の管理者会議に出席し、会議内容を職員に伝えミーティングで話し合うようにし、ミーティングで出た内容は、再度会議に挙げている。	管理者は職員とのコミュニケーションを図り、個別ケアの充実に向け全職員が意識を共有している。日々のケアの中での職員からの意見や提案を、法人全体の管理者会議(週1回)の中で合議している。代表もホームに足を運び状況確認を行われているとともに、年2回の個人面談時に意見や要望を聞き取りされている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境条件の整備に努めている	年に二回の人事考課と個人面談を行い職員の特性などから異動や昇格の検討を行っている。本人の家庭環境も考慮し働きやすい環境を整えている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	宇城圏域の勉強会や毎月一回のスタッフ勉強会を開催し職員に可能な限り出席を促している。また、資格取得に向けた勉強会を開催している。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	宇城地区グループホーム連絡会に出席し、勉強会や研修などを通じ情報交換を行っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入居時にはご家族やご本人からゆっくりと話を する機会を設け、今までの生活歴や入居 後の要望などの情報収集に努め、入居後安 心した生活を送って頂ける様に良好な関係 作りを心掛けている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っている こと、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係 づくりに努めている	入居時には施設内を見学して頂き、ご家族 の本人に対する気持ちや要望などを十分に 聞き取り心配なことには丁寧に答えるよう努 めている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「そ の時」まず必要としている支援を見極め、他の サービス利用も含めた対応に努めている	入居前に本人様やご家族と担当者会議やカ ンファレンスを行い、必要なサービスを導入 するようにしている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、 暮らしを共にする者同士の関係を築いている	職員は入居者の生活スタイルを大切にし、 掃除や食事の準備など個性に沿った暮らし 方の支援をするように心掛けている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、 本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支 えていく関係を築いている	職員はご家族と電話やメールで情報を交換 しながらご家族と本人様の関係を大切にし ている。ご家族との外出や外泊などいつも 出来るように支援している。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場 所との関係が途切れないよう、支援に努めている	地域の公民館で毎月行われている「いきい きサロン」や「どんどや」などの地域の行事 に参加してもらい地域の方との交流支援に 努めている。	家族や地域の方の訪問や家族との電話での やり取りの他、馴染みのコンビニでの買い 物、生け花や習字、裁縫等生活歴・職歴にを リサーチし、個別に支援している。また、初詣 やチランを見ながら会話が弾み、自宅までの ドライブに繋げている。毎月のいきいきサロン や神社参詣、どんどや見学に出かけており、 これまでの人・場所との関係性を継続して支 援している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	おやつ作りやレクリエーションなどを通じて馴染みの関係を築いて頂くよう支援している。トラブルが起きたときは職員が間に入り対応している。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	長期入院や個別の事情等でサービスの利用が終了した後もご家族と連絡を取り相談や支援できる体制を整えている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	言葉だけではなく、表情などの非言語コミュニケーションを通して希望や、思いを把握できるように努めている。ご家族にも本人の希望を伝え、担当者会議などを通じて本人の思いを家族にも伝えている。	入居者の発する言葉や行動・表情等見落とさないよう寄り添うながら、希望や意向を収集している。チラシを見て「こんなのを作っていた」との言葉を献立に生かしたり、「お酒を飲みたい」が、夕涼みの会で応えており、本人本位のケアを実践している。入居者の“したい・行きたい”に随時応える事こそ、「いま・この時”に寄り添うという理念の実践である。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	日頃のコミュニケーションやご家族との話などでこれまでの暮らし方や生活環境を聞き、把握に努めている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	日々の状態変化をケース記録に残し、一人ひとりの心身状態、環境変化などをスタッフ間の「報・連・相」を徹底し状態の把握に努めている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	毎日30分のミーティングを行い課題やケアのあり方を検討し、介護作成担当者を中心に本人・家族と話し合い介護計画を作成している。	担当制を採用し、毎月のモニタリングにより達成状況を見極め、3か月毎のカンファレンス、6ヶ月毎には新たなプランを作成している。入退院時アセスメントからの見直しと、家族との協議により新たなプランを作成しており、家族や担当職員の意見等が反映した現状に即したプランとなっている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	日々の記録や普段と違う言動や変化がみられた時は詳しく記録し、ミーティングにて情報を共有している。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	「お寿司を食べたい」「買い物に行きたい」などのニーズに出来るだけ対応している。問題が発生した時は前向きに取り組み解決策をミーティングで話し合っている。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	毎月傾聴ボランティアを利用したり、地区のいきいきサロンに参加されるなどの地域資源を活用している。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	主治医協力のもと、体調の変化や緊急時には、ご家族と連絡を取り受診や往診にて対応している。また専門医を受診する事で安心した生活を送れるように支援している。	かかりつけ医については家族の了承のもと現在は全員が協力医療機関により月2回の往診を受けている。また、専門医の受診については、主治医のアドバイにより適切な医療支援に繋げている。日常の健康管理は看護職員を中心に、職員は表情や動きなど異常があれば、医師への連絡や必要によっては受診に繋げている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	看護師による日常的な健康管理や利用者の状態を把握している。気づきや体調変化時には、看護師に伝え医療面から適切な指導、援助を受け主治医との連絡調整連携を行っている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院時には職員が定期的に面会し、状態の把握に努め、担当看護師・相談員と連絡をとりその都度主治医に報告しながら、いつでも退院出来るよう体制を整えている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所のできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	入居時にご家族へ説明を行っている。また事前指定書をご家族に記入していただき、本人・家族の意向を知り、今後についての話し合いをしている。	入居時に看取りに関する指針や事前指定書をもとにした説明を行っている。ホーム内での研修は行われていないが、管理者が外部研修に参加し職員へ復講しており、看取りケアへの意識を高めている。入居者の急変としてAEDを事務所に備え、緊急時対応マニュアルを整備している。	現在、職員も看取りについて深く考える機会はないようであるが、今後は必要に応じて研修の機会を持つことも必要と思われる。
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	緊急対応マニュアルを職員間で徹底させている。またAEDの使用方法を消防署に依頼し実技講習を行っている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	消防署立会いのもと年2回の防火非難訓練を行っている。夜間時の訓練がまだ出来ないのが今後の課題である。	年2回の防災訓練は今年6月と年度末に予定している。訓練後消防署員より、声は出ていたがベッド下の確認不足や避難場所を1箇所だけでなく他の場所も検討しておく事などのアドバイスを受けている。職員は居室掃除時に、コンセントなどの室内確認も行っている。	今回の熊本地震では、ホームに大きな被害がなかったことは幸いである。今後は火災に加え自然災害についてもあらゆる想定による訓練等により有事に備えていただきたい。夜間想定訓練や訓練時に受けたアドバイスを今後活かすこと、近隣消防団や地域の方々と一緒に訓練を行いたいとしており実現が期待される。
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	人格を尊重する対応を心掛け、傾聴と共感に重きを置いたケアを実践している。	理念にある一人ひとりの今までの歩みを大切に、寄り添いのケアに努めることを共有している。管理者は入居者の尊厳に配慮した対応について、ある程度はできているが、フレンドリーになりすぎていないか…としながらも、方言については大切にしていきたいとしている。呼称は安心される呼び方を家族に確認し対応している。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	日々の生活の中で本人の自己決定を尊重したケアを心掛け、ご自分の意見や思いを言える環境作りをしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	散歩や買物など個別に対応し、生け花や習字など昔されていた事をレクリエーションに取り入れるなど一人ひとりのペースを大切にしよう努めている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	外出や、入浴時の着替えなどご自身で選んで頂き、出来ない方は、ご家族に好みの服などを聞きその都度確認しながら着用して頂いてる。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	ホーム内では食事を作っていないが、食事の準備や盛り付け、食後の片付け等体調や意向を確認しながら職員と一緒にやっている。食事・おやつ作りのレクも定期的に行っている。	調理は法人厨房で行われているが(米飯はホーム)、クッキングの日を設け、おやつや昼食のメインを入居者と一緒に作る機会を設けている。メインは担当職員が季節に応じた物をインターネットなどから情報を収集している。直近では栗ご飯や団子汁などを作っており、担当者は材料や感想など記録用紙で残している。また、希望の麺類店への外食や『居酒屋夜長月』と命名した夕涼みの屋台など、併設事業所との合同イベントも開催している。ノンアルコールビールやビールサーバーの準備により入居者は普段と違った楽しい食事イベントとなったようである。	職員は検食を兼ね1名が同じ物を、他の職員は持参した弁当などを見守りや介助を行いながら摂っている。食形態や晩酌への対応など個別支援に努めた食事が支援されており、今後も好評のクッキングの日の回数を増やすなど入居者の楽しみに繋げて頂きたい。
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事の摂取量が把握出来るように毎食記録に残し、必要な方には水分チェック表を用いて水分不足にならないように心掛けている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後スタッフ見守りで口腔ケアを実施し、必要に応じて介助している。訪問歯科診療にて治療やメンテナンスを希望し利用されている方もいる。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	入居者全員の排泄チェック表を作成し、排泄パターンを把握し個々に合わせた声掛けや誘導に取り組んでいる。また夜間の排泄状況の観察を行い排泄用品を使い分け、本人に合わせた支援を行っている。	排泄は自立の方もあり、何時でも気持ちよくトイレが利用できるようにしている。また、声かけや誘導の必要な方には、食事前後など個々に応じて対応している。殆どの方が日中はリハビリパンツを使用されているが、夜間のみ紙オムツの方もおられる。また、体調によっては一時的にポータブルトイレの仕様など、状況にふさわしい支援を検討している。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	水分摂取量を確認し水分摂取を促している。ヨーグルト等の摂取や主治医より処方された薬で調整を行い、腹鳴や腹部の張りの確認し毎日の体操や散歩などで活動量を増やし、自然排便が出来るよう取り組んでいる。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	入浴日は一日おきと決まってはいるが、曜日や時間帯の希望を確認しながら個々に合わせその都度対応している。	入浴は浴室や脱衣所の掃除や季節に応じた室温など環境を整え、週3回程入ってもらえるようにしている。最後にゆっくり入りたいや、拒否の場合も職員を交代したり時間をずらすなど、無理強いしないことで入浴を楽しめるようにしている。また、衣類の準備や洗身などできる事を行ってもらう事で、自分の入浴を味わってもらっている。今年はドライブを兼ねて温泉や足湯にも出かけている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	一人ひとりのペースに合わせ、昼夜逆転しないように日中の活動が出来るように支援し、穏やかな気分で眠りにつけるように配慮している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	個人の薬ケースに薬の説明書を貼り、職員が把握できるようにしている。薬の変更・追加時等には申し送り表に記入し、状態変化時には主治医に連絡し、指示を仰いでいる。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	掃除や食事の準備など負担にならないよう気をつけながら出来るだけ職員と一緒に手伝って頂いている。晩酌や趣味の生け花などをされている方もいる。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	日常の会話や家族の話などから行きたい所を把握し定期的に外出を計画している。「自宅に帰りたい」「買物に行きたい」の希望にはその都度職員が付き添い対応している。	職員は入居者との日頃の会話や家族からの情報をもとに、個別の外出の希望を把握し、買い物や自宅への帰省などを支援している。また、行事予定表を家族へ郵送し外出への同行を依頼しており、今年度は外食などを一緒に楽しんでいる。地域資源を活用し体育館で事業所対抗の運動会に参加したり、どんどやに出かけている。管理者は車酔いの方もあり、今後も入居者の無理にならぬよう中庭での日向ぼっこや、一人ひとり入居者の状態に合わせて外出を行っていきたいと考えている。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	基本的には預かり金の管理はホームで行っているがご自分で財布を持っておられる方もおり、好きなものを購入出来るように支援している。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	ご家族や友人に連絡したい方は自由に電話が出来るようにしている。携帯電話を持っておられる方もおり、居室にて自由にお話をされている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	入浴後は必ず掃除し、その都度お湯の入れ替えを行っている。共通のトイレはこまめに清掃し、使用される方が不快にならないように心掛けている。湿度・温度計をを確認しながら温度・湿度を調整している。	玄関やリビングホールをはじめ浴室など室温管理に努め、季節によっては加湿器を用いて乾燥を防いでいる。日中はホールで過ごされる方が多く、季節の飾りを施し、正月は書き初めを掲示し新しい年を祝っている。また、音楽や録画した歌番組など入居者の好みから楽しめる時間を持っている。カウンターテーブルからは竹の庭が望め、入居者同士が笑顔で静かに語り合う姿は穏やかな光景として映り、居心地のよい環境が作られている。	モダンな造りであるが明るさといった点では不十分であり、これまで照明器の変更なども行われている、構造や照明器では補えない部分を、今後も職員の明るい笑顔や挨拶などにより、入居者や来訪者に接して頂きたい。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	窓辺に椅子を配置し、外を見ながら新聞を読まれる方やソファでくつろがれるなど利用者が思い思いに過ごされている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	居室には、家具やご家族の写真等好きなものを飾られ居心地よく、安心して過ごして頂けるようにしている。	それぞれの居室で居心地良く、安心して過ごしてもらえるようにしている。入居時にホームの設置品や馴染みの品の必要性を伝えており、テレビやぬいぐるみ、小物などが持ち込まれているが、収納スペースが限られており、持ち込みの量は比較的少ないようである。中には写真を用意されることもあるが、逆に不穏になられる場合もあり、家族は本人の希望と状況に応じた品を準備している。衣替えや衣類の管理は面会も兼ねて家族の協力を依頼している。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	一人ひとりの心身状態に合わせて、掃除や食事の準備を職員と一緒にして頂いてる。ケアの統一を心がけ安心して生活が出来るように努力している。		